

〈巻頭言〉

禁じられた読書と声の復元

図書館長・教授 番 場 寛 (フランス文化 フランス文学)

レイ・ブラッドベリ (Ray Bradbury) 原作でF.トリュフォー (François Truffaut) によって映画化された『華氏451度』では、あらゆる読書が禁じられた未来社会が描かれている。ある人が本を読んでいるという通報を受けた消防署員は、突然その家に押し入り、隠してある本を見つけ没収し、焼いてしまう。映画の題名は紙の燃える温度を示していると言われている。

滑稽なのは、没収する仕事をしている消防士の男が、実は自宅にこっそりと自分で読む本を隠している場面である。映画の最後は、読書を続けることにこだわり続ける人々が、都会から逃れ、難民として人里離れた森の中にコミュニティを作りそこで生活を送っているところが描かれる。人々はやがていつかはそこにも当局の手が及び、あらゆる本が没収されることを危惧し、それに対抗する手段として、口伝として書物の内容を次の世代に伝えていこうとする。つまり、各自が頭の中に書物を入れてしまえば、奪われることはないというのだ。

映画の最後に、もうすぐ息絶えようとする老人が幼い子にある本の一節を語り、男の子がそれを耳で聞いて声に出し記憶しようとする場面がある。本来、言葉が次の世代に伝わっていくということはこういうことなのだということが、まざまざと見せつけられる。

ところで、それとは逆に、声に出された言葉が他人の手によって活字に移されて書物となったものを、私は30年以上も研究の中心

対象としている。それはJ.ラカン (Jacques Lacan) の講義録 (Séminaires) である。ラカンが年度によって場所を変え、一般聴衆に向けて行った精神分析に関する講義は、精神分析の技法に止まらず、哲学・文学・言語学を参照する人間理解の内容で、難解さにも拘わらず多くの聴衆を魅了してきた。

ラカンの講義は内容自体が困難な上、言葉遊びや新造語に溢れ、速記されたものや録音されたものから活字に掘り起こすのは至難の作業だということは想像できる。ラカンの娘と結婚したことで、遺産を引き継いだJ.=A.ミレール (Jacques-Alain Miller) が編纂した版が正式な版として出版が認められているが、その版はミレールが聞き取り、解釈し、活字にしたものなので、部分的に異論が後を絶たない。

私は8月以外の毎月第3日曜日に、朝10時から休憩をはさみ、夕方の5時くらいまで、京都大学の新宮一成先生を中心にしたそのラカンの講義録の読書会に参加しているが、私が参加してからもう23年ほどたっていることに驚く。

その読書会で、解釈困難な箇所につづかる度に、ミレール版とは別の、「国際ラカン協会」が会員用に発行した版を参照する。その二つの版の狭間から、ラカンが声として発したこと、意味として伝えたかったことが浮かび上がってくるのを聴き取ろうとするのは、至福の体験である。